慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジュリアン・ソレル, 挫折した芸術家
Sub Title	Julien Sorel, artiste avorté
Author	古屋, 健三(Furuya, Kenzo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.124(233)- 136(221)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジュリアン・ソレル，挫折した芸術家

古　屋　健　三

『赤と黒』の主人公，ジュリアン・ソレルは，一般的には挫折した野心家(ambitieux)としてとらえられ，その多感で，意志的な生きかたが多くの青年を魅してきたのだが，じつはそれは表層的な物語で，その背後にいまひとつ挫折した芸術家の物語が隠されているのではないかというのが本論の主旨である。ほんらいならジュリアンは芸術家になるべき麗質だったのに，その才能を花開かせることなしに闇に葬られていく，その髀肉の嘆が『赤と黒』の詩情の正体だと論者は考えている。

こんな思いにかられるのも，じつはたった一個所だが，作者スタンダールがジュリアンのことをこんな男は芸術家になればよかったのだと洩らしているからである。第Ⅰ巻の終り，ジュリアンが神学校に在学しているときのことである。ジュリアンは聖体祝日の当日きれいに飾りつけられたブザンソンの聖堂の見張りに立つが，そのとき大鐘が鳴るのを聞いて，心の底からうち震え，夢想の世界に誘われていく。作者スタンダールはそんな足が地につかないジュリアンを芸術家になるよりほかにない男だとからかうのである。

> Les sons si graves de cette cloche n'auraient dû réveiller chez Julien que l'idée du travail de vingt hommes payés à cinquante centimes, et aidés peut-être par quinze ou vingt fidèles. Il eût dû penser à l'usure des cordes, à celle de la charpente, au danger de la cloche elle-même, qui tombe tous les deux siècles, et réfléchir au

moyen de diminuer le salaire des sonneurs, ou de les payer par quelque indulgence ou autre grâce tirée des trésors de l'église, et qui n'aplatît pas sa bourse.

Au lieu de ces sages réflexions, l'âme de Julien, exaltée par ces sons si mâles et si pleins, errait dans les espaces imaginaires. Jamais il ne fera ni un bon prêtre, ni un grand administrateur. Les âmes qui s'émeuvent ainsi sont bonnes tout au plus à produire un artiste.

この鐘の重々しい響きは，ジュリアンのうちに，50サンチームで20人の男が働かされ，それにおそらくは15人から20人の信者が手をかしているという考えを呼び覚ますべきだったろう。綱や木組みがすり切れ，二世紀ごとに鐘が落ちる危険を考えるべきだったろう。いかにして鐘つき人の給料を少なくするか，あるいはその給料を支払うのに，教会の財源をへらさずに，蔵のなかから免罪符なりお守りなりをとり出して，それにあてることはできないか考えるべきだったのである。

ところが，こんな賢いことを考える代りに，ジュリアンの魂は，雄々しく，張りきった鐘の音に昂揚して，空想の領域をさ迷ってしまう。決して彼は良き僧侶にも，有能な官吏にもなれないだろう。このように感動する魂はせいぜいのところ芸術家を生み出すぐらいが関の山だ。

みられるように，ジュリアン・ソレルは俗事に適していない夢想家とみられ，芸術家になるのが天職だとみなされている。この分析を信ずれば，ジュリアンは自分の資質を見誤り，自分の進むべき道を誤ったということになる。しかし，それにしては，ふしぎなことにジュリアンはただの一度も芸術に関心を示さず，ましてや芸術家になることなど夢にも思わない。一枚の絵を心にかけるわけでもなく，音楽を聴くのが好きなわけでもない。また，1820年代芸術家になるのは，僧侶になるのと同じくらい，青年にとって魅力的な出世コースだったと思われるが，ジュリアンの意識には芸術

家の影も射さない。

もちろん，これは，端的に言って，ジュリアンが芸術的環境に育っていないからだろう。幼いときに元軍医官の伯父からナポレオン軍の戦闘の話を聞き，町の司祭シェラン師から神学の手ほどきを受けて育ったのでは，いかにすぐれた芸術的な天分でも実の結びようはない。ジュリアンの繊細な感性は頭をもたげるたびに，臆病風（timidité）として抑えこまれてしまう。「武器をとれ！」（Aux armes!）という野蛮な言葉が生きる指針になっている状況では，ジュリアンは芸術家になりようがないのである。

しかし，それにもかかわらず，ブザンソンの聖堂のなかで，ジュリアンが芸術家的資質をむき出しにしてしまうところをみると，この資質は枯れ果てることなく，ジュリアンの心の深いところに根をおろしていたことがわかる。なぜそれがこともあろうに聖堂で表面に浮上してきたのかといえば，すくなくともこのときジュリアンが社会，現実，肉体を去って，他界，精神の世界に遊んでいたからだろう。ということは，ジュリアンにとって芸術は抑圧の結果この世界から追放されていることになる。逆にいえば，この世の外に追いやられた芸術がジュリアンを他界に誘うといってもよい。そして，その契機となるのが鐘の音である。いうまでもなく，音はふだん気づかない深みに人の心を誘うが，ジュリアンの生涯は大事な瞬間においてかならずといっていいほど鐘や時計の音に刻まれて，異様な佇まいをみせる。ヴェルジイの庭でレナール夫人の手を握る合図となる大時計の音。国王がヴェリエールを訪問したときに鳴り響く祝砲の数々。神学校を訪ねたときの呼鈴の音。密書の謀議をこらす会議の席で時を告げる時計。法廷で1時，2時を告げる時計。その他，一々拾いあげたらきりがないほど，ジュリアンの生涯には運命を刻むかのように鐘や時計の音がつきまとっている。

この瞬間，ジュリアンはふるえ戦くのだが，それは意識下においてなぜ自分が芸術家にならなかったのか，そのためには自分になにが欠けているかを切実に感じたからだとはいえないだろうか。すくなくとも，ここでジュリアンは自己の根源的な喪失，欠落と向き合っている。それではジュリ

アンに具体的になにが欠けているのかといえば，それはエロスであり，母親であるといってよいと思う。というのも，ブザンソンの聖堂で，放心したジュリアンが出会うのが，別れてきた母親のようなレナール夫人だからである。

『赤と黒』のなかでは，ふしぎなことにジュリアンの実母については一言も触れられていないが，これが芸術と結びついた抑圧の対象であると考えると，ジュリアンの生の方向はその消去によってかえってみえてくる。ブザンソンの聖堂のなかで，ジュリアンは忘却の彼方に追いやられていた母親の俤と対面するのである。そういえば，ジュリアンが生家を去って，レナール家に家庭教師として赴いたとき，真先に耳に飛びこんできて，ジュリアンを心底から震えあがらせるのは，鐘や時計の音ではなく，レナール夫人の声である。

> Madame de Rênal s'approcha, distraite un instant de l'amer chagrin que lui donnait l'arrivée du précepteur. Julien, tourné vers la porte, ne la voyait pas s'avancer. Il tressaillit quand une voix douce dit tout près de son oreille :
>
> ——Que voulez-vous ici, mon enfant ?

> レナール夫人は，家庭教師がやってくるのでうつうつと苛立っていた気分から一瞬まぎれて，近寄っていった。ジュリアンは戸口の方に向いていたので，夫人がくるのが目に入らなかった。優しい声が耳もとでしたきとには，飛びあがらんばかりに驚いた。
>
> —坊や，なにかご用なの？

このようにみると，鐘や時計の音の基には母親の呼び声が秘められていることがわかる。ジュリアンの感性はそれまで彼に欠けていたエロスの声に目覚めたといえる。自分を坊やとして受け入れてくれる，優しい女性の声に出会ったのである。

しかしながら，ジュリアンはこの母親の声を耳にしたときの強さでずっと聞きつづけることはできない。それは現実には鐘や時計の音に変質して，ジュリアンをうち震わせることになる。なぜ母性の声が非人間的で，超越的な運命の声に変質してしまうのか。ここにジュリアンの人生の鍵があるのだが，一言で言ってしまえば，それは，前述したように，自分を見誤ってしまった人間の悲しさだろう。じつは，レナール夫人の声に不意打ちされてうち震えるまえに，ジュリアンは途中立ち寄ったヴェリエールの教会ですでに震え戦いている。このときは鐘の音でも誰れかの声でもなく，荘厳な雰囲気のなかで犯罪者としての自分の未来をみてしまうからである。そして，ジュリアンの不幸はこの二種の戦慄のうち，始めの認識的戦慄だけを信じて，二番めの感性に係る戦慄を一番めの戦慄の変種としてしか理解せず，それを抑圧してしまう点だろう。かくしてレナール夫人の声は鐘の音と変じてしまうのである。後に，ジュリアンは，レナール家を夜遅く訪ねてきて，打ち沈んだ一家をすっかり明るくする歌手ジェロニモの生きかたに共感して，「まったく，レナール氏になるくらいなら，ジェロニモになったほうがましだ」(Ma foi, j'aimerais mieux être un Géronimo qu'un Rênal) と呟くが，じっさいはレナール氏と通じる道を歩んでしまう。前述したように，ジュリアンはその育ちからして父性にしか関心がなく，母性＝芸術を抑圧するからである。

ジュリアンの出生が問題にされるとき，母親は誰れであるかは話題にされず，ただ，どこの貴族の落とし子であるかが問われる。ジュリアンは自分は「父や兄，家族全員から嫌われている一種のすて子」(une sorte d' enfant trouvé, haï de mon père, de mes frerès, de toute ma famille) だと思っているし，また，「自分はナポレオン大帝によってフランシュ・コンテの山地に追放された，どこかの大諸侯の落し胤かもしれない」(Serait-il bien possible, se disait-il, que je fusse le fils naturel de quelque grand seigneur exilé dans nos montagnes par le terrible Napoléon ?) と空想したりする。この想像はジュリアンばかりでなく，ジュリアンに接したほとんどすべての人がとりつかれる考えである。神学校長のピラール師は「こ

の辺の山地の大工の倅だというのですが，私はどこかの金持ちの私生児だと思っているんですがね」(On le dit fils d'un charpentier de nos montagnes, mais je le croirais plutôt fils naturel de quelque homme riche) とラ・モール侯爵に打ち明けるし，マチルドはケェリュスに向かって，「明日にでもフランシュ・コンテの山国の田舎貴族のだれかがジュリアンを自分の私生児だと認めて，名前と何千フランかの財産を譲れば，一月半もしないうちにジュリアンはあなたがたと同じように口ひげを生やしたりするわよ」(——Que demain quelque hobereau des nontagnes de la Franche-Comté, dit-elle à M. de Caylus, s'aperçoive que Julien est son fils naturel, et lui donne un nom et quelques milliers de francs, dans six semaines il a des moustaches comme vous, messieurs) と言う。決闘相手のボーヴァジーはジュリアンがラ・モール侯爵の友人の私生児だという噂を社交界に流す。このようにジュリアンの血は全員の手でこぞって神話化される。これは物語機能からいえば，ジルベール・デュラン『パルムの僧院の神話的背景』(Gilbert DURAND: Le Décor mythique de la Chartreuse de Parme) が詳細に分析するように，『赤と黒』を貴族流離譚として成立させるためのテクニックだろうが，いずれにせよジュリアンが自分の出自を考えていくときに，母親よりも血統を重視していることは確かである。

ジャン・ジャック・アン『スタンダールのテキスト：完成と未完成』(Jean-Jacques HAMM: Le Texte Stendhalien, Achèvement et Inachèvement) は，60年代における精神分析学の成果と言われるジェラール・マンデル『父親に対する反抗』(Gérard MENDEL: La Révolte conrte le père) を援用しながら，ジュリアンのうちに「基本的に父性的な価値すべてに対する盲目的で，汎破壊的で，非合理な暴力」(une violence aveugle, pandestructrice, irrationnelle contre toutes les valeurs d'essence paternelle) をみている。いつまでも19世紀ではあるまいし，ジュリアンを野心家(ambitieux)，出世主義者 (arriviste) と頑なに分類するよりは，この解釈は現代的で，示唆に富む。それに，考えてみると，このジュリアンの性格分析

は，作者スタンダールが1832年にイタリアの雑誌のために書いた『赤と黒』紹介記事のなかのジュリアンの性格描写とよく似通っている。

彼（ジュリアンは），家庭において，たえず目の敵にされ，なぐられ，からかわれてきたので，その深く繊細な心はことごとに傷つけられ，疑い深く，怒りっぽくなり，有無を言わさず幸福をとりあげられるのでひがみっぽくなり，ことのほか気位が高くなった。

Comme, dans sa famille, il est l'objet, le but constant des coups de poing et des plaisanteries, cette âme profondément sensible et sans cesse outragée devient méfiante, colère, envieuse même pour tous les bonheurs dont elle se voit barbarement privée, fière surtout.

しかしながら，それにもかかわらず，アンの分析がジュリアンの一面しかとらえていないと思われるのは，レナール夫人の存在と夫人の存在がもたらす幸福感がこれではうまく説明できないからである。それに，ラ・モール嬢との恋愛においても，ジュリアンには倒錯の影はなく，マンデルが詳細に検証しているケースとは違い，ジュリアンは感情的に未成熟で，ひ弱なわけではない。

スタンダール研究家のあいだでは，ラ・モール嬢との恋愛は頭脳恋愛とされ，評判が悪いが，よくみると，青春の情熱が激しくぶつかり合っていて，これは立派な情熱恋愛である。たしかに，ジュリアンもマチルドも自然にふるまうよりは，それぞれ役柄を演ずることに一生懸命で，とくにマチルドはジュリアンとの恋愛にマルグリット・ド・ナヴァールの行状をひとつひとつなぞっていく。その擬態は処刑されたジュリアンの首を膝のうえにのせて自らの手で葬るところまで行くが，だからといってマチルドが真剣でないとはいえない。人工的といえばその通りだが，人工的でない青春などがどこにあるだろうか。もちろん，ふつう青年は理想にもえ，未来

に向けて模作するのだが，マチルドの場合その規範が乗り越えられるべき過去にあり，その点で不幸でもあり，滑稽でもあった。ただ，それはマチルドの過誤というより，時代の罪であったと言えないだろうか。マチルドが青春を過したロマン主義の時代は失われた青春に憧れながら，自らのエネルギーをかき立てていく時代であった。フローベールが『ボヴァリー夫人』で書く悲喜劇を，スタンダールは30年もまえに先どりして書いている。『赤と黒』II巻第10章にはユーゴオ『エルナニ』上演成功に対して激怒するアカデミー会員が描かれるが，スタンダールは『赤と黒』を書いた時点でロマン主義を完全に乗りこえていたといえる。

スタンダールがロマン主義をその最盛期においてすでに乗りこえてしまったのは，青春の最中において青春をすでに乗りこえる体験をなめていたからである。一般的に1800年代のスタンダールは戦功華々しいナポレオン軍と行動を伴にしたり，女優と同棲したりで，輝かしい幸福の時代と考えられているが，その日記を丹念に辿っていくと，その底から絶望と悲しみと恐怖の呻き声が聞えてくるのに驚かされる。たとえば，あれほどさまざまな女性と接していながら，スタンダールがその姿を忘れまいと日記にしっかりと書きとめるのは絶世の美女ではなく，骸骨のような女である。1804年4月30日，スタンダールは劇場でその不吉な女に出会って，こんな風にその衝撃を書きとめる。

> J'ai vu du côté du consul, dans les loges, une femme qui ressemblait comme deux gouttes d'eau à un squelette. Elle était de la blancheur d'une tête de mort bien lavée ; elle etait vraiment glaçante. C'est ce que j'ai jamais vu de plus fort dans ce genre-là ; je la regardai beaucoup pour en conserver une idée nette. Elle était bien vêtue. C'était l'horreur de la mort seule et sans aucune autre horreur.

桟敷で，執政官のとなりに，骸骨と瓜ふたつの女をみた。彼女は蒼白

で，よく洗った死人の首のようだった。みていると，心が凍えてきた。こんなひどい顔はみたことがない。その姿をしっかりと心に収めておこうと，しげしげと女をみた。服装は悪くない。しかし，死のおぞましさの化身で，それ以外の何物でもなかった。

もちろん，これはマチルドのなれの果てである。ジュリアンの血だらけの首に接吻してから20年，30年たって，マチルドはこんな生命の抜けた，死相を人前に曝すのである。それが過激な青春を生きた者の宿命だろう。ジュリアンが生まれてくる息子の世話をとくにレナール夫人に頼むのは，こんなマチルドの未来の顔をみてしまったからである。

ジュリアンはマチルドと同じように寄るべき行動の規範をもつが，ただジュリアンにおいてその規範のナポレオンはなぞるべき行動の型ではなく，現実に働きかけるエネルギーの源泉であった。ジュリアンにとってナポレオンは応用問題だったので，そこがマルグリット・ド・ナヴァールのドラマをただ忠実に再現しただけのマチルドとの分れめである。

ジュリアンは法廷の最終陳述で自己を「身分の低さに反抗した百姓」(un paysan qui s'est révolté contre la bassesse de sa forturne) と位置づけ，その罪を，「下層階級に生まれ，いわば貧に押しひしがれながら，幸いにもしっかりとした教育を受け，金持ち階級が傲慢にも上流社会と呼んでいるものにもぐりこもうとした大胆さ」(nés dans un ordre inférieur, et en quelque sorte opprimés par la pauvreté, ont le bonheur de se procurer une bonne éducation, et l'audace de se mêler à ce que l'orgueil des gens riches appelle la société) と定義している。これはジュリアンが法廷という公的な場に提出した，もっとも表面的な自画像で，わかりやすいが，ただジュリアンがこれだけの人間だったならば，ラ・モール侯爵が「あいつの性格の底にはなにかおそろしいものがある」(mais au fond de son caractère, je trouve quelque chose d'éffrayant) と怯える必要もなかっただろうし，結婚を望む娘に「おまえのジュリアンは何者かわからない」(Je ne sais pas encore ce que c'est que votre Julien) と手紙に書くこともなかっ

ただろう。成りあがり者と軽蔑すればすんだからである。また，マチルドに翻弄されたジュリアンが苦しみのあまり，「なぜおれはこうなんだ？」（Pourquoi suis-je moi ?）と絶望の叫びをあげることもなかっただろう。生まれが卑しいからだと説明してしまえば，答えは出てしまうからである。

ラ・モール侯爵を怯えさせる，ジュリアンの得体の知れない正体とはなんだろうか。それは体制を破壊するジュリアンのエネルギーというより，むしろ体制とは係れないジュリアンの悲しみではないだろうか。ベルテ事件，ラファルグ事件と同時代の犯罪事件に『赤と黒』の創作モデルをみる研究者が多いが，それはあくまで物語の表向きであって，大事な点はやはりジュリアンがどの点で作者スタンダールの分身かということであろう。いったい作者スタンダールは主人公ジュリアンになにを托したのか。端的に言って，それは小説は芸術かという問題ではないかと思う。物語によって果して人間は救われるだろうか。スタンダールはジュリアンにこの問題の検証をゆだねたのだと論者は主張したい。そして，これが『赤と黒』の隠れた主題にほかならないと思う。

前述の最終陳述で，ジュリアンはしっかりした教育を受けたと語っているが，ジュリアンが受けた教育とはもっぱら書物を読むことであり，聖書を始めとして丸暗記で言葉を頭のなかにつめこむことであった。ジュリアンはブザンソン聖堂の主祭壇の天蓋を飾りつけたり身軽だが，ナポレオンの闘いの原理に心酔していながら，ひそかに武芸を磨いて，力に優る兄に一矢を報いようなどとは考えない。闘いの姿勢はあっても，現実に具体的な敵に対するわけではなく，むしろ恐怖とか気おくれとか，内心の影を抑えつけることに大童である。つまり，闘いは頭のなかで交わされる，想像の産物なのであり，それはひとつの仕組まれた物語であるといえる。

ジュリアンが読む闘いの記録も，ナポレオンの戦報や『セント・ヘレナ日記』といった戦果の物語であって，戦力の分析や戦闘術など実際的な指南書ではない。このようにジュリアンはナポレオン戦争の跡をたどりながら戦術家としてではなく，物語作者として自分を育てていくのである。ジュリアンはナポレオン崇拝の結果書くことに憑かれた男となり，いかなる

危険を冒しても書かざるをえない男となる。ナポレオンの肖像の裏に熱烈な頌を書き，ヴェリエール山中の洞窟のなかで感想を綴っては亢奮し，レナール夫人の攻略計画を忘れないようにと文字に認め，軍医官の讃を書いてラ・モール侯爵にくずライター（écrivailleur）ととがめられ，フェルヴァック夫人誘惑の手順を忘れないために攻略日誌（journal de siège）をつけることを思いつき，マチルドとの恋愛沙汰で身の安全を計って物語形式の短い弁明書（petit mémoire justificatif arrangé en forme de conte）を友人のフーケに送り，その自分史にまるで劇作家のように感動する。(Emu de son propre conte comme un auteur dramatique)。みられるように，ジュリアンは生きるということよりも，生の軌跡を書きとめることに熱心であり，出世物語を生きるよりも書くことに熱中しているといえる。マチルドと結婚できることに決まったとき，ジュリアンは「ぼくの物語は終った」(Mon roman est fini) と呟くが，これは文字どおりジュリアンが書いてきた物語が結末に達したことを意味していよう。ジュリアンはナポレオンにならって闘いと征服の物語を書いてきたのだが，マチルドを手に入れることによってその目的は達せられたのである。

しかし，このジュリアンの自己満足のなかには命とりの罠が仕組まれていた。ほんらい，ナポレオン物語は発禁であり，人目に触れてはならない，ジュリアンの秘められた物語のはずである。したがって，ジュリアンが有頂天になって自らの正体をさらけ出すと，社会から罰せられて，犯罪人に転落してしまう。ジュリアンはレナール家に家庭教師として住みこむまえに，ヴェリエールの教会に立ち寄り，新聞記事の断片をみつけるが，そこに語られている犯罪者の姿がジュリアンのナポレオン物語の社会版である。ジュリアンがいくらナポレオンを気どっても，社会の目からは彼は犯罪者にすぎない。それにしても，『パルムの僧院』の主人公ファブリスに対する予兆が鳥とか樹木とか牢獄とかイメージの形をとるのに対して，ジュリアンに対する予兆が，ルイ・ジャンレルという彼のアナグラムを始めとして，明確な文字で表わされている点に注目してよいだろう。ジュリアンは言語によってがんじがらめに縛られた社会内存在なのである。

このようにみてくると，ジュリアンがレナール夫人に発砲したのは，レナール夫人の手紙によって呼び覚まされた犯罪者の物語という，より真実な物語に殉ずるためだろう。近代小説が，政治という，コンサートの最中にぶっ放されたピストルの音を我慢しなければならないように（La politique au milieu des intérêts d'imagination, c'est un coup de pistolet au milieu d'un concert），近代小説の主人公も社会に対してピストルをぶっ放すような関係をとらざるをえない。言語の網のめのなかにとらえられ，のたうつ近代作家の姿はミッシェル・クルーゼ『スタンダールと言語』（Michel CROUZET : Standhal et le langage）に詳しいが，ただジュリアンの場合，犯罪者の筋書きはいまひとつ意外な物語に横滑りしていくことになる。牢獄のなかで，ジュリアンは犯罪者の屈辱をなめるよりも，主としてレナール夫人と非言語的空間を幸福に生きるのである。ジュリアンはここで作者が願ったように芸術家に変身する。

> Jamais cette tête n'avait été aussi poétique qu'au moment où elle allait tomber. Les plus doux moments qu'il avait trouvés jadis dans les bois de Vergy se peignaient en foule à sa pensée et avec une extrême énergie.

> この頭は，まさに落ちようとする瞬間，かつてないほど詩的になった。かつてヴェルジィの森で味わったもっとも甘美な瞬間がつぎからつぎへと，それも極めて鮮明に頭をよぎった。

文字に束縛されていたジュリアンはいまやその網のめから逃れて，イメージの世界に解き放されている。ジュリアンの頭脳にあれほどつまっていた言葉はひとつ残らず消えてなくなり，代って風景がつぎからつぎへとくり拡げられていく。ジュリアンにこの転換が可能であったのは，死に直面して，自我へのこだわりが消えてしまったからだろう。したがって，ジュリアンは死について思いをめぐらすとき，蟻やかげろうの立場に身をおい

たりする。硬直した思考ではなく，柔い感性にしたがって，いまジュリアンはなんにでも自由にもぐりこめるのである。そこから生き生きした，斬新な言葉が湧き出てくるはずだが，もちろんジュリアンはそんな生きた言葉に出会えるほど長生きはせず，失語症のまま死んでいく。しかし，ジュリアンは青春を生き切ることがそのまま大人の世界に骸となって生きのびるのではなく，創造の世界へ飛躍できることを身をもって示し，芸術家スタンダールを誕生させるのである。